
にわかあめ（ガンバレ）

南条武都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

にわかあめ（ガンパレ）

【Nコード】

N8408F

【作者名】

南条武都

【あらすじ】

ハンガーで起きた突然の喧嘩。壬生屋が遠坂を殴ったその理由とは？ガンパレード・マーチSS。（自サイト掲載）

村雨

忘れない。

いつも前を歩いてきた背中を。

優しく頭を撫でてくれた大きな手を。

全てを受容する大海のような、おおらかな笑顔を。

決して忘れはしない。

がしゃんがしゃん、と音を立てて工具の中に倒れ込んだ遠坂は、体の下に敷いたレンチやスパナが背中に食い込み、顔をしかめた。

「う、つつ……」

しかし痛みはそれだけではない。口の中が切れたのか、慣れない血の味を感じる。

じんじんと熱くなりはじめた頬を押さえて起きあがると、灰色に染まる無機質な背景の中で、一際目を引く赤と白の胴着の少女が、駆けつけた速水に羽交い締めになされていた。

彼を殴り倒したのは、可憐な乙女。

「離してっ、離してくださいー！」

しかし壬生屋は、遠坂が起きあがるのを見ると、怒りをあらわにして狂ったように暴れている。

「だ、駄目だよ壬生屋さん、落ち着いて……っ！」

髪を振り乱して遠坂に襲いかかろうとする彼女を、速水が必死に押さえつけている。少女とはいえ、渾身の力で拘束を外そうとする壬生屋の力は、彼の手に余った。

「ひっ……」

その剣幕に遠坂はぞっとして後ずさる。今の壬生屋ほど、激烈な怒りを宿した目で睨まれた経験が彼には無かった。また壬生屋が暴力を振るう前に誰か来てくれ、速水と遠坂の二人がそう思った矢先、

「あなた達、何をしているのー！」

騒動を聞きつけた原が、階段を上がってきて恫喝した。

ハンガーの騒音すら圧する声に、壬生屋と遠坂と速水、それから自分ではどうしようもなく、おろおろと事態を見送っていた田辺と滝川もびくりと震える。

「……今は仕事の時間よ。喧嘩なら校舎裏でやる事ね」

場が静まったのを逃さず、原は遠坂を立たせて、速水の拘束も解かせる。誰が騒動の原因かは、聞かずとも一目で知れたので、

「壬生屋さん、遠坂君。話は教室で聞いわ。いらっしやい。速水君達は、そのまま仕事を続けて」

きつい眼差しを二人に投げかけると、背を向けて階段を下りていく。

その言葉に我に返って「はい」と答えた速水達は、戸惑いの眼差しを当事者へ向ける。

あたりの気まずい雰囲気を感じ取った遠坂は、（……何で僕が）と思いながらも、素直に原の後へついていった。

しかし、壬生屋は動かない。

肩から滑り落ちる黒髪の合間に顔を隠し、震えながらじっと立ちつくしている。高ぶった感情を処する方法が無いかのように、ただきつく拳を握りしめる。

「壬生屋さん、来なさい」

壬生屋の摺るような足音が聞こえない事に気が付いた原は、階段の下から声を発する。その強い口調は、紛れもなく副委員長の命令だった。

「……」

少女は一瞬顎をあげた後、とすとすと静かに歩き始める。

皆の不安の眼差しを受けて、ゆらりゆらりと動く黒髪は空に残像を描き、そして消えた。

「それで？ いつまでそうやって、だんまりを続けるのかしら、二人とも」

突き刺さるような原の声に、濡れタオルを頬にあてた遠坂は目を伏せ、壬生屋は堅い無表情のまま空を見据えていた。

「……全く、もう……」

何度問いかけても、同じ沈黙しか返ってこない。窓の外はすっかり夜のとばりがあり、月が皓々と照っている。

もうそろそろ、のみと彼女を送る瀬戸口や、ヨーク達が帰る時間で、原にとってはこれからが本当の仕事時間だ。他にもやることが山のようにあるから、早くハンガーに戻りたいのに。

いい加減うんざりして、原はため息をついた。

体格に男女の差があるといっても、パイロットの壬生屋と整備士の遠坂では、体の鍛え方が違う。喧嘩をすれば当然、壬生屋が勝つことになるだろう。

しかしもともと潔癖性の壬生屋のこと、よほどの事が無い限り、喧嘩を売るはずがないし、遠坂にしてもそれほどの問題児というわけではない。この二人が喧嘩をしたというのなら、相当の理由があるはずなのだ。

それを聞き出して事態をまとめるのが原の役割だが、ここまで強情に口を閉ざされるとどうしようもない。

「遠坂君。壬生屋さん」

だめ押しのつもりで呼びかけるが、やはり答えはない。どちらも貝のように固く口を閉ざしていて、開けようという気にすらならないようだ。これ以上粘っても、何も聞き出せないだろう。原は嘆息して諦めた。

「仕方がないわね……これじゃあ、今日はもう仕事も出来ないだろうし、二人とも帰りなさい。」

明日、委員長と先生のほうから改めて、話を聞く事になると思うわ。

……ああ、遠坂君。あなたは石津さんでも捕まえて、手当してから帰りなさい」

「……はい。分かりました」

「……………」
不承不承といった顔で首肯する遠坂。
しかし壬生屋はあくまでも答える気がないらしく、白い頬を紅潮
させて、きつく唇を噛んだだけだった。

「壬生屋さん」

夜気が肌をさすプレハブ校舎前に下りた遠坂は、少女の後ろ姿に
声をかけた。

だが壬生屋は足を止めない。無言のまま、校門に向けて歩いてい
く。

その頑ななまでの拒絶にむっとして、遠坂は大腿で追いつき、肩
を掴んだ。

「壬生屋さん、ちょっと話を」

彼にしては乱暴な仕草で、こちらを向かせようとする。

途端、熱いものに触られたかのように、壬生屋は遠坂の腕を
振り払った。

ぱん、と大きな音が夜のしじまに響く。

「……………」
タオルが地面に落ちる。

名を呼ばれても、肩に手をかけられても、一言も発しない壬生屋。
頬に続いて手にも痛みを与えられて、遠坂は呆気にとられた。理
由は分からないが、彼女が本気で怒っている事に今更ながら気が付
く。

振り返りもせずに行ってしまうおうとする彼女の背中が冷たくて、
それが悲しいほど辛い。人からこれほど明確な拒絶を受けたのも初
めてだったので、遠坂の苛立ちはあっさり消え去ってしまった。

「……………壬生屋さん……………どうしてですか……………」
思わずぼろりと疑問が転げ出る。

「……………」
その声に反応して、壬生屋は少し先に行ったところで足を止めた。

すでに校舎内には、ほとんどの人影が無くなっていたので、明かりもまばらにしかついていない。

空には星が瞬き、ざわざわと木々は鳴き、壬生屋の黒髪が風に揺れた。その姿は、今にも闇にとけ込んでしまいそうなほど儂く、脆く見える。

ときおり見せる柔らかい笑顔が印象的で、おかしい事を言っしまう自分を軽蔑する事もなくて、強い心を持っていて、いつも真っ直ぐ前を見続ける姿が眩しくて……そういうふうになりたいと、秘かに思ってきた少女。

多分今までは、それほど嫌われてはいなかった。少なくとも、友人だと思っていた。彼がぼろりぼろりとこぼす愚痴を、優しく聞いてくれた。それなのに、

「……何故、僕を殴ったんですか」

「……」

びくり、と壬生屋の肩が動いた。少し顎をひいて俯く。ためらうように頭をふる。顔にかかったらしい髪を払う。

そういった一連の動作をしてようやく、壬生屋は振り返った。一瞬ほっとしかけた遠坂は、そこでまたぎくりとした。

壬生屋の表情は、遠坂が期待したような優しいそれとも、原に向けた無表情のそれとも、激怒のそれとも違う。

今にも泣きだしそうな顔。

「……本当に、理由が分からないのですか」

震える声で、壬生屋は遠坂を責める。潤む目で睨み付ける。

「わたくしは……わたくしは、一生あなたを許しません」
ぐっと歯を食いしばった頬に、涙が滑り落ちる。

「……もう、わたくしに話しかけないで下さい」

そして、黒髪が空に散った。

「みぶ」

伸ばした手は華奢な肩に届かない。しかし届いたとしても、彼はきつと掴む事は出来なかった。

校舎裏へ駆けぬけていく姿を呆然と見送り、遠坂は髪をかきあげる。

壬生屋の瞳に浮かんだ涙が、訳の分からない重さでのしかかってくる。自分の言った事で彼女を激しく傷つけた事が、あまりにも重く感じられた。

だが、何故あれほど嫌悪されなければならないのだろうか？

「……………」

人の気配に、遠坂はハツと顔をあげた。いつの間そこにいたのだろう、小隊長室のそばに立つ大木の影に小柄な少女が一人……石津萌が、じつとこちらを見つめていた。遠坂と視線が合うと、彼女は影から足を踏み出して、近づいてきた。土のついたタオルを捨ててから、彼の袖をつかむ。

「石津さん……何、ですか」

いつも暗雲を背負っているような萌の様子に、遠坂は身を退き気味だ。しかし彼女の方は、

「……………手当……………しなくちゃ……………」

話し方はいつも通りなのに、意外な積極さで彼を整備員詰め所へ連れていこうとしている。今の遠坂は、あまり人と関わり合いたくはなかった。特に萌のように、つき合いにくい人種は。しかし、頬が今更ながらずきずきと痛みを訴え始めていて、我慢ならない。

(……………家まで我慢するよりは良いですかね)

遠坂は顔をしかめながら、仕方なしにそう思った。

整備員詰め所は普段もそれほど人の出入りがない部屋なので、いつもひっそり静まり返っている。

「……………そこ……………座って……………」

呼吸のついでに出しているような萌の掠れ声に従い、遠坂は背もたれのない椅子に腰掛けた。そして萌をうかがう。

先ほどの会話を、萌は確実に聞いていた。いやそれ以前に、ハンガーでの出来事はすでに小隊の皆知っている事だろう。

何しろ珍しい組み合わせの喧嘩だったし、ハンガーであれだけ派手に暴れたのだから、噂にならないほうがおかしい。おそらく明日からしばらくは、気まずい雰囲気があるところを漂う事になるだろうし、好奇心で彼らに事の真相を聞こうと寄ってくる者もいるはずだ。

しかし遠坂が懸念したように、萌は事情を聞こうとはしなかった。黙々と怪我の手当をするだけで、その間に言った事といえば「口をゆすいで」くらいだ。

なので、初めはかなりびくびくしていた遠坂も、次第に体の力が抜けてリラックスする事が出来た。萌が手際良く治療を行う姿を見て、さすが衛生官と素直に感心する。だから、

「……これで……良いわ……」

「……有り難うございます、助かりました」

頬に湿布を貼って萌が呟いた時、遠坂は礼を言った。そして痛みをこらえて、口元を僅かに綻ばせるだけの笑みを浮かべてみせる。言葉だけの感謝では、足りない気がしたからだ。

「……」

萌は救急箱の蓋を閉じ、彼の微笑をじっと見つめる。

いつもより心持ち背筋を伸ばし、顔をあげた萌は、思っていたよりもずいぶん印象が良い気がする。何となく気恥ずかしくなると、遠坂は椅子から腰をあげた。

「もしかして、今まで待つていてくださったんですか？」

こんな小柄でか弱そうな少女なのだ、夜道を歩くのは怖いだろうから、いつもはもっと早く帰っているだろう。しかし今日はもしかしたら、遠坂と壬生屋の件で残っていてくれたのかもしれない。そう思って尋ねると、彼女はこっくり頷く。

「それはすみませんでした。おわびに僕が送っていきますよ」

「……いい、の……大丈夫……」

「いえ、駄目です。今車を呼びますから、待つてください」

多少強引に言っ、携帯電話を取り出す。

電源を入れて運転手へかけると、もの一コールもしないうちに相手が出た。どうやら帰りが遅いのを心配して、何度も何度もかけてきていたらしい。

遠坂は面倒な説明を省き、すぐ来るように命じて、すぐに電話を切った。殴られたと言え、お抱えの医師がとんできかねない。

「すぐに来ますよ。ああ、荷物を取ってきましょうか」

まだじつとこちらを見つめている萌に気を利かせて尋ねるが、彼女は小さく首をふった。すっと指さした机の上に、二人の鞆がきちんと並べておいてある。どうやらわざわざ持ってきてくれたらしい。「重ね重ね、有り難うございます。このお礼はいつかきつとしますね」

「……そんな、事……いいの……」

萌は俯いた。どこか戸惑うような様子に、おやと思う。人の気持ちに鈍い遠坂でも、それが困っている仕草なのは分かる。それは彼の事が迷惑というよりも、礼を言われるのが慣れていないように思えた。

（……そういえば彼女、いじめられてると聞いた事があるような……）

誰かが噂でそんな事を言っていたような気がする。それでは、これほど内向的になるのも当然だろうな、と遠坂は同情した。

同時に、手当してもらった礼に話し相手になるのも良いだろうと思、話題を探す。が、

「あの……石津さん」

「……なに……」

「いえ、あの……」

言葉をかけてみたものの、言う事がない。まさか天気の話をするわけにもいかず、遠坂は言葉に詰まってしまった。

こちらを見る大きな瞳から視線を逸らしてどうしたものか、と考え込むが、結局思いつくのは彼が今一番触れたくない話題だった。

「その……あなたは、何も聞かないんですね。壬生屋さんの事とか……」

「……興味……ないもの……」

「そ、そうですか」

とつとつと零れた言葉に、遠坂はがっかりした。嫌な思いをしなから出した話を繋げてくれはしないのか、どうしようと困ってしまふ。

「……でも」

しかし意外にも、萌は言葉を続けた。

「……でも、あれは……あなたが……いけない……わ……」

「……え？」

その思いもかけない非難に、目を丸くする遠坂。

「どうしてです？ 僕はただ話をしていただけですよ？」

話の内容についてはおおっぴらに言えるものではなかったが、だからってあれほど激しく殴られるものとは思えない。

壬生屋ならば、驚くかもしれないが、きっと親身になって聞いてくれると思ったからこそ、彼は自分の胸のうちを明かしたのだ。

その結果があれば、彼は一方的な暴力の被害者であって、非難されるいわれはない。

「……でも、あなたは……幻獣を……善いものだと……言った……から……」

ガタン。

遠坂は思わず椅子をけ飛ばして立ち上がった。顔からといわず全身から血の気がひく音が聞こえた気がする。

「何故、それを……」

幻獣共生派は、見付かり次第、裁判なしで銃殺。

まさか萌に殺される事はないだろうが、彼女から善行に話が漏れれば、間違いなく刑は執行されるだろう。慄然とする遠坂だが、萌は俯いただけだった。

「……私は……あなたが……共生派……でも、興味ない……でも……」

「……」
「ふるふると首を振ると、長い髪が揺れる。」

「……でも……壬生屋さんは……違う……」

「え？」

髪の間から上向きにこちらを見つめる瞳は、深い湖の底のように暗く、冷たく感じられた。

「……詳しい事……知らない、わ……でも……壬生屋さんの、お兄さんは……幻獣に……殺されたの、よ……」

『最近、幻獣派について良く考えるんですよ。彼らは、いや、幻獣は本当に悪なのかって。本当は我々が悪で、彼らが善ではないか、と』

『わたくしは、一生あなたを許しません』

「……！！」

先ほど以上の衝撃に襲われ、遠坂は思わずよろけた。心臓が鷲掴みにされたようにずきりと痛み、全身の血が凍り付く。壬生屋があれほどまで激昂した理由を、ようやく理解出来たのだ。

激怒したのも、涙を浮かべたのも、遠坂に絶縁を叩きつけたのも全ては、もういない兄を思う故。

兄を殺した幻獣を憎む故に、無神経な言葉を放った自分を許せないと言ったのだ、彼女は。

「ぼ……僕、は……」

顔面蒼白になった遠坂を、萌はただ見つめる。その眼差しからは冷たさが消え、かわりに哀れんでいるかのような輝きが宿っていた。細い声が唇からこぼれ落ちていく。

「……あなたは……言っっては、ならない事を……言っってはならない、人に……言っただの……よ……」

「僕は……僕は……っ」

萌の微かな言葉も、今は容赦なく突き刺さってきた。

反論しようと思いた口から出た言葉は、意味を成さない。胸がずきずきと痛み出して、遠坂は思わず胸元を掴んだ。

『……本当は我々が悪で、彼らが善ではないか、と』

(何て事を言っただのさ。自分こそが本当の悪じゃないか。被害者のふりをして、最悪の加害者になっていたんじゃないか……)

くつと歯を食いしばって俯く遠坂を相変わらず凝視していた萌は、ふつと視線をそらし、鞆を手にとって無言のまま外に出ていった。

もう彼には責められる資格すらない、と言いたげな背中に見えて、遠坂はますます身につまされた。

壬生屋が怒るのは、自分が殴られたのは当然の事だ。

遠坂は胸を掴んでいた手を頬にうつし、痛むのも構わず、湿布の上から強く押さえつけた。

手当を受けたはずの頬が熱い。

出来ればこのまま、消えてしまいたかった。

……わたくしは、忘れない。

手足をもちがれ、人形のように並べられた兄の姿を。

わたくしの太刀の下でもがき苦しむ、醜い獣の姿を。

……わたくしをずたずたに傷つけた、あの言葉を。

決して、忘れる事は出来ない。

驟雨（しゅうう）

「では、壬生屋さんと遠坂君の処分は自宅謹慎とします。いいですね」

小隊隊長室の、お決まりの席に座した善行は、眼鏡を押し上げて、目の前の二人を見比べた。

度の入っていないレンズ越しに見える男女は、固い表情で「はい」と答える。

先ほどから少しも口を開かなかったというのに、返事だけは一人前だとひそかに苦笑して、善行は二人を帰らせた。やれやれ、と背もたれによりかかる。

匙を投げた本田から処分をまかされたものの、当人は喧嘩の原因について、どうしても口を割らない。加えて壬生屋は一番機のパイロットであるから、司令としても、これ以上の罰を与える事は出来なかった。

というよりも、何しろ戦時中なのだから、本来ならこんな事は放っておきたかつたくらいだ。

しかし、一応小隊の士気にも関わるから、相応の処分をしなければならぬのが面倒なところである。

見上げた時計が朝の八時をさしている。善行は軽く首をひねると、教室にむかうために立ち上がった。

その時、窓から見えた遠坂の後ろ姿に、誰にともなくふと呟く。

「共生派と反幻獣派、か。全く……皮肉なものだな」

まだ人もまばらなプレハブ校舎の教室から鞆をとってくると、壬生屋は女子校の廊下へ入った。きつと顔をあげて、すたすたと歩いていく。

一応授業の準備はしてきたのだが、どうせこういう事になるだろうと思っていたのだ。謹慎処分を受けたのは、かえって気が楽だっ

た。たぶん父は早く帰ってきた娘に何事か、まさか授業をさぼったのかと怒るだろうが、問われても理由は言えない。それだけは面倒だと思う。

幻獣共生派は見付かり次第、銃殺。

壬生屋は眉間にしわをよせた。

いくらあの男が、彼女の逆鱗に触れる発言をしたからといって、告げ口する気にはなれなかった。遠坂は一応友人だったから、間接的とはいえ、自分の手で殺すような真似はしたくないからだ。

「……」

ふう、と小さくため息をつき、壬生屋は目に付いた女子トイレに入った。洗面台の前に立ち、鏡の中の自分をじっと見つめる。

(……酷い顔)

腹の底によどむ怒りのせいか、まるで幻獣を前にした時のように険しい顔をしている。それに加え、ここしばらく根を詰めていたせいか、目の下にくまができ、肌も荒れているような気もする。昨日は髪の手入れも忘れてしまったから、ばさばさに広がっていて、ひどくうっとうしい。

蛇口をひねって、壬生屋は顔を洗った。冷たい水で、しかも面を流す。鞆からハンカチを出して雫を拭くと、壬生屋は気を取り直した。

とにかく今日は大人しく自宅謹慎していよう。戦闘が無ければ、久しぶりにゆつくり出来るのだから、部屋を掃除したり、箆笥の中を整理するのもいいかもしれない。

気分転換の方法をあれこれ考えながら、壬生屋は廊下へ出た。そして正門の方角へ歩き出した時、

「……！」

そちらの方からやってきた瀬戸口と、もろに視線がぶつかった。途端、瀬戸口の秀麗な顔が歪む。なぜだか知らないが、彼は壬生屋の事を毛嫌いしているので、顔をあわせるたびに、身を切り刻まれるような言葉を投げかけられるのだ。

自分が何か気に入くない事をしているのかもしれないが、壬生屋には全く覚えがなかったから、自然に萎縮して顔を強ばらせた。

「……」

何か、朝の挨拶でもしたほうがいいだろうか。思いながらも、無視される事が怖くて、壬生屋は俯きがちに彼の脇をすり抜けた。何も言われなかったとほっとした次の瞬間、

「……酷い顔だな」

あざけるような声に身体が硬直する。

振り返ると、瀬戸口が半身だけ動いて、彼女を見ていた。その眼差しはやはりいつものように冷たく、深い紫色の眼に壬生屋を映し出している。

とげとげしい物言いに警戒して、壬生屋はその目をにらみ返した。「何かご用ですか」

「別に。ただ、あんまりにも酷い顔してるから、そういつただけだ」

「……放っておいてください。あなたには、何の迷惑もかけていないでしょう」

「確かにな」

ふ、と鼻で笑い、瀬戸口は身体をこちらに向けた。陽光差し込む廊下の、柔らかい空気をまとった姿は美しいのに、薄い唇は苛立たしげに曲がる。

「……だがな、俺はそういう顔が嫌いなんだ。自分は何も悪くないと言っているようで、腹が立つ」

「なっ……」

カッと頭に血が上って、壬生屋は言葉を詰まらせた。瀬戸口は容赦ない。畳みかけるように言う。

「お前のは、悲劇のヒロインぶって、自分だけが不幸だと思ってる女の顔だ。しょんぼり俯いてれば皆が同情してくれると思ったら、大間違いだ」

「……っ！」

思いもかけない罵詈雑言に壬生屋の目頭が熱くなり、視界がわずかにぼやける。こんな事を言う男の前で泣いてたまるかと、齒を食いしばって何とか自制しながら、

「あっ、あなたにそんな事を言われる筋合いはありません！」
一気に吐き出すように叫ぶ。

瀬戸口はしかし怯んだ様子も無く、冷やかな視線を向けてきた。その表情には、壬生屋に対する嫌悪しか浮かんでいない。彼は瞳をすうと細くして低く笑うと、くるりと背を向けて歩いていってしまう。声をかける事すら許さないその背中を凝視して、壬生屋はきつく唇を噛んだ。

どうしてあれほど言われなければならないのか。
どうしてあれほど嫌われなければならないのか。

(何も知らないあなたに、そんな事を言われる筋合いはない)

もう一度そう怒鳴りつけたかったが、瀬戸口の台詞が壬生屋の胸に突き刺さって抜けず、声は出なかった。

「……………」

壬生屋は、ぐっと奥歯を噛みしめてからごしごしと涙を拭くと、人が来る前に走った。

嫌だ、何も考えたくない。早く家に帰りたい。

今にも泣き出してしまいそうな顔で、口を手で覆った壬生屋の耳には、登校し始めた人々のざわめきが遠くに聞こえていた。

俄雨

閉じた目を開き、その上に乗せていた腕をあげると、見慣れた高い天井が見えた。遠坂は、柔らかく身体の沈むベッドに横たわったまま、ぼんやりと視線を彷徨わせる。

今が何時なのか、何日で何曜日なのかも分からない。

自宅謹慎はたった一日だけだから、それほど大袈裟に考える事でもない。それなのに遠坂は、もう少なくとも一ヶ月くらいは、こうして呆然としているような気がしていた。

「……ふっ」

そう感じる自分の気弱さに、冷笑が浮かぶ。たかだが一日部屋にこもっているだけで、何て気の小さい事だ。これだから、自分は駄目なのだ。壬生屋なら、きっと毅然と構えているだろうに。

そう思った途端、目尻に涙を浮かべた彼女の顔を思い出し、胸に石を落とされたような重みを感じた。

自分が何も考えずに言った言葉一つで、壬生屋は泣いてしまった。それまでは、戦場の最前列を駆け抜け、常に凜々しく立っている少女だと思っていたのに。壬生屋は泣いて、怒ってしまった。

自分の無神経さのせいだ。

彼女を傷つけた事への罪悪感で、遠坂は気が遠くなりそうだった。今この時、もしかしたら壬生屋が泣いているかもしれないと思うと、自分の喉を引き裂いて叫びだしたくなる。

彼女に泣かれるくらいなら、こんな罪悪感に切り刻まれるくらいなら、いっそ口汚く罵られ、嘲笑を投げかけてもらいたい。そうする事で、少しでも壬生屋の気が済むのなら。

しかしもう話しかけるな、という彼女自身の断罪で、その願いすら叶わない。

息も出来なくなりそうなほど苦しくなり、遠坂はきつく拳を握りしめた。歯を食いしばって、うめき声を押し殺したその時、

……とんとん。

控えめなノックが耳に届いた。

「ぼっちゃま、おきていらっしやいますか？」

穏やかな声をかけて入ってきたのは、昔から遠坂の世話をしている執事だった。自宅謹慎を受け、昨日から部屋にこもりっぱなしの彼を心配して、何度も機嫌を伺いに来ているのだ。

「昼食をお持ちしました。少しでも口にいられていただけませんか」

穏やかな顔に気遣いの表情を浮かべて、昼食の皿をいくつも乗せたカートを押して入ってくる。遠坂はその芳しい匂いに、空腹を刺激されて起きあがるが、

「……何もいらぬ。下げてくれ」

ぷいっと顔を背ける。

一人で考え事をしたかったので、それを邪魔されなくなかったし、相談して自分の馬鹿さ加減を思い知らされるのもごめんだった。それに、この執事は彼のことを良く知っているから、よけいに話づらい。

「しかし、ぼっちゃまは昨日も何もお食べになりませんでしたし、よう？ 何か口に入れませんか、お体に良くありませんよ」

執事はそれでも何とか遠坂にものを食べさせようと、冷たいスープのカップを手に近寄った。何も知らないのに、傷心の彼を慰めようとすると、その優しい声がいらついた。

「いらぬと言っただろう！」

「あつ……」

叫んで遠坂が大きく振った手はカップにあたり、中身が執事の服にかかった。カップは床に落ちて勢い良く転がっていく。その音にはっとして、遠坂は顔をあげた。

「……申し訳ありません、今すぐ片づけます」

執事が慌ててナプキンを引っぱり出して、床にぶちまけられたスープを拭き始めると、遠坂がいきなりそのナプキンを掴んだ。掴まれた方の執事は、驚いて目を瞬かせる。

「ぼっちゃま？ 何をなさいます」

遠坂はそのナプキンで、なかば躍起になって彼の服を拭いた。力をこめて押しつけるものだから、それは余計に服を汚していたのだが、彼は必死の形相である。

「……僕が……これは僕のせいだ……」

きつくナプキンを握りしめ、遠坂は眉間にしわを寄せた。

その様子に、執事は困惑する。スープが服にかかったといつてもほんの少しだ。後でクリーニングに出せば綺麗に落ちる。その程度のこと、なぜこれほど遠坂が必死になるのか分からない。執事は遠坂の手を止めた。

「お気になさらないで下さい。ぼっちゃまはこのような事をなさる必要は……」

「違う！」

彼の優しい声を鋭く遮って、遠坂はかぶりを振る。

「違うんだ、僕は……僕は……少し、苛々していて、八つ当たりをしてしまっただけなんだ。」

こんな事をして、本当にすまない」

いつこうに落ちない汚れが悲しくて苛々した。自分の迂闊な行動が、また人を傷つけている事が腹立たしい。うつむいて何度もすまない、と謝る。

執事は困った顔をしてどうしたものか、としばらく黙っていたが、遠坂が言葉を失って口を閉ざしてしまうと、

「……そんな風におっしゃらないでください。」

私は、坊ちやまがきちんとお食事をして、元気でいてくださればそれで良いのですから。さあ、お立ちください。ここを片付けたらまたスープを持ってまいります」

穏やかに言って、彼を立たせる。

「……」

遠坂は黙って立つと、ベッドの縁に座った。そのまま、執事がてきばきとスープをふき取り、テーブルに食事をセッティングするの

をぼんやりと眺める。

自分がどれほど軽率で、相手の事を考えていないか、あらためて思い知らされたようで、辛かった。執事の優しさを素直に受け入れられない自分が、むなしかった。

「……」

ぼんやりとさまよう視線が、窓の外にあるバラのつぼみに止まった。薄く黄色がかったつぼみは、その上に乗った水の玉を光にはじいて輝いている。

遠坂は顔を上げると、汚れたナプキンとカップを手に出て行くこうとする執事に声をかけた。

「じい、花を」

「はい？」

振り返った彼の顔を見返して、遠坂は一瞬自分の手を見下ろした。それから少し笑うと、言いなおす。

「じい、花瓶を持ってきてくれ。一輪挿しじゃないやつだ」

「花瓶でございますか。分かりました、今お持ちします」

突然の注文に首をひねりながら、執事は扉の向こうに姿を消した。

「壬生屋さん、おはようございます！」

「え！？」

振り返った先でいきなり黄色いものを突き出され、壬生屋は思わず身をひく。しかし少し離れてみれば、窓から差し込む朝日に鮮やかな黄色を輝かせるたんぽぽの花束だと分かった。

自宅謹慎から明けて翌日。登校してきた壬生屋が一番初めに会ったのは、たんぽぽの花束を突き出す遠坂だった。彼女が何事かと目を瞬かせていると、遠坂は頭を下げたまま、

「一昨日は……一昨日は、本当にすみませんでした！こんな、言葉で謝れば済むような事じゃないことは分かっています。あなたには口もききたくないと言われました。

でも、お願いです。僕は、僕はあなたと友達になりたいんです。

僕にはあなたが、初めての友達なんです。

もう二度とあんな事は言いません。だから…僕にもう一度チャンスを下さい！」

頭を下げている遠坂を、通り過ぎりの女子高生が眉をひそめて避けて行く。その視線に壬生屋は顔を赤くさせてしまった。端から聞いていれば、まるで交際の申し込みの口上だったが、遠坂は心底真剣なようだった。

壬生屋は困惑しながら、彼とその手に握られた花束を見下ろした。遠坂の言った事はどれだけの時が経とうと許せるものではなかったし、彼が再び同じ事をしないという保証はどこにもない。今ここで謝罪を受け入れても、また傷つくだけかもしれない。

しかし、

（お前のは、悲劇のヒロインぶって、自分だけが不幸だと思いこんでる女の顔だ）

「……！」

鋭く突き刺さる言葉が蘇り、思わず息をのんだ。

「壬生屋：さん？」

遠坂はその気配を怒りによるものと思ったのか、眉を八の字にした情けない顔をあげて彼女を見る。それはまるで、母親から叱られる事をおびえる子供のような表情で、見捨てないでくれ、と必死にすがりついてこようとしていた。

「……」

壬生屋は思わず泣きそうになりながら、懸命に笑みを見せて、遠坂の持つ花束をそっと受け取った。

「……わたくしこそ、お願いします」

胸が痛かったけれど、なんとかそれだけは言う。それを聞いた遠坂は、ぱっと顔を輝かせた。

トイレの壁に寄りかかって立っていた瀬戸口は、外の気配が遠ざかっていくのを確認して、髪をかきあげた。やっと外に出られると

思いながら、

「……………雨降って地固まる、か」

何気なくつぶやいてふと見上げた鏡に、自分の姿が写っていた。赤とも青ともつかない紫の瞳が、鏡の中からこちらをにらみつけている。

「……………不幸ぶってるのは、あの女だけじゃないな」

そう、お前もだ。

誰かの告げる声に、嘲笑のような苦笑のような形に唇の端を少し上げると、瀬戸口はゆっくりと廊下に出る。

明るい日の光は今日も、彼にはまぶしすぎた。

俄雨（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます！

初めに、遠坂ファンの方申し訳ありません。私の彼のイメージってこんな感じです。

初めて彼の幻獣擁護を聞いた時まず思ったのが「幻獣に身内を殺された人にそれいっしょなよ!?」でしたもので。

私には遠坂の言う事って、自分の現状に反発しての発言であって、そこに深い考えは無いように思えるんです。

だから「幻獣はそれほど悪くない、何となくそう思う」などと言ってしまう。幻獣を善とするのも、自分の回りのものを悪にしたいからだと思うんですね。なんて言うのかな…青い鳥が自分の家にいる事に気が付いてない、というか。

回りの人の気持ちにも鈍そうですし、不注意な発言で誰かに殴られるって事が実際ありそうです。

でも本人は誰かに教えてもらうまで理由が分からない。無意識に自分が被害者になっちゃうから。で、分かったら今度は地の底まで落ち込むと。うーん駄目駄目ですね、すみませんファンの方（苦笑）

タイトルの村雨・驟雨はどちらも俄雨の意味です。最初に村雨のストーリーを考えた時にタイトルをつけようと広辞苑を繰って見つけたもので、「いつも騒動が起きては収まり、起きては収まりの小隊にはぴたりのタイトルじゃないか」と思っつけてみました。オチのない話になっているようですが、人間関係は1と0で割り切れるものではないと思うので、この曖昧さを楽しんでいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8408f/>

にわかあめ（ガンパレ）

2011年8月15日03時24分発行